

定時三分前、少し気の緩んだ雰囲気の中に、ヒールの音が鳴り響く。

誰にもバレないようにため息をついた。もう驚きはしない。これで何度目か分からない、定時前に鳴り響くこの音は、わたしを目の敵にしているお局様の靴の音だ。

「南さん。これ、今日中にお願ひしたいんだけど」

はい、と小さく返事をしながら資料を受け取る。

前より幾分増えた気がする紙の束を憂鬱な気持ちで眺めていると、ポケットに入れているスマートフォンが震えた。これも何度目か分からない、定時ごろのメッセージだ。

席から去っていく彼女にバレないように、こっそりと確認する。

『今日こそは来れるだろう？　うちで待ってる』

わたしは何度目か分からないため息をつき『すみません、今日も無理そうです』と——これまた何度目か分からないメッセージを返した。

繁忙期で一週間帰らなかったらいつも余裕な

彼氏の堪忍袋の緒が切れちゃいました

限界御曹司様

による

ドS覚醒



激愛わからせ
えっち回

ろこもこうさぎ

ろこもこうさぎ

絢辻 透

ごく普通の平社員。ごく普通の仕事ぶり。

取り立てて目立つところもなく、輝かしい経歴もなく、多くの大人がそうであるのと同じように、ただ仕事に追われる日々を過ごすわたしには——
何の因果か、とんでもないスベツクの彼氏がいる。

あれは数ヶ月前のことだった。

毎月の支払いに重くのしかかる奨学金を返すため、会社に内緒で体験入店したラウンジで突然指名され、まだ右も左も分からないまま接客をしたことがあった。

（あの時は、まさかこんなことになるなんて……）

すぐに返ってくるメッセージの通知を見ながらあの日に思いを馳せる。

あのときわたしを指名したのはVIPのお客様で、なんと現在わたしが務めている会社の会長息子だった。

帰る前、ポンと店で一番高額のシャンパンを入れていった日本有数の財閥御曹司。

その人こそが今まさに、わたしのスマホの通知を鳴らしている「とんでもないスペックの彼氏」なのだが――

『まどかさん、君は会社に監禁されているんじゃないか？』

卒倒しそうな肩書きの彼からのメッセージには、戸惑いと心配が滲んでいるようだった。

もうかれこれ一週間はこの有様だ。毎日のように残業を言い渡され、日付が変わる頃にヘトヘトになって一人暮らしの家に帰るばかりで、彼と顔を合わせる暇もない。

しかし正直に言わせてもらうと、原因は彼だ。

初めて会ったあの日以降、ラウンジへの出勤の予定はなくなり、連絡もできずにいたわたしを彼が会社まで探しに来たことがあった。

「ずっと、探していたんだ……まどかさん。君に、会いたくて」

今思い出しても恥ずかしさでいっぱいになる思い出なのだが――そこか

ら、わたしと晴臣さんの噂は女子トイレで定番のトークテーマになってしまった。

一応表面的にはお付き合いを隠しているのだが、噂が絶えることはなく、一週間ほど前にお局様こと渡村主任の耳にまで届いてしまったらしい。

そこから、この嫌がらせのような仕事の振り方が始まってしまったというわけだ。

“知ってる？ 主任、定期ケースに晴臣様の写真入れてるらしいよ”
“あー、ガチファンなんだ……まあ正直わかる、顔良すぎるもんね”

トイレの個室に入っている間、そんな会話を盗み聞きしてしまっただけは強く出ることもできない。

いまだに会社では様付けで呼ばれている、わたしの彼氏——鷹宮 晴臣さんは、錚々たるスペックに引けを取らない顔面偏差値だからだ。

アイドル顔負けの艶やかな黒髪、彫りの深い目元と精悍な眉毛、形のよい引き締まった輪郭と、真顔でも常にほんの少し上がった口角。

どの角度から見ても、何度顔を合わせても、慣れることのない彫刻のような美しい顔立ちをしている。

渡村主任にしてみたら、そんな憧れの存在がたかが平社員で取り立てて特徴もない、ごく普通の女と噂になっているのだから、たまったものではないだろう。

（そりやそうだよね……。わたしだって、なんでこんな素敵な人がわたしと付き合ってくれてるんだろうって、よく思っちゃうし……）

たとえどんな性格でもその顔とスペックだけで爆モテ間違いないだといふのに、晴臣さんは決して驕ることなく、会う度に精悍な目元を緩ませながら「今日も可愛い」と囁いてくれる。

その度に心がとろけてしまつて、晴臣さんのこと以外何も考えられなくなってしまうのだが――

冷静に考えると、なぜわたしなんかと、とは思つてしまう。

（たぶん、相手が必要だったんだと思うけど……）

あくまで想像だけれど、この数ヶ月でじわじわと思うことがある。

晴臣さんは相手を作るのを急いでいたのではないだろうか。

いつかもっと晴臣さんにふさわしい本命の相手が現れた時、わたしはお役御免になってしまふ気がする。

けれど。

そう考えるたび、思い出すのはあの日、その目にわたしだけを映しながら囁く、熱っぽい眼差しだ。

“どうして？ 責任取るよ、まどかさん。君のこと、一生大事にする”

心臓がきゅつと震える。リップサービスだとしても、忘れられない言葉だ。ままならない接客をしたあの日から変わらず、会う度に情熱的な言葉をかけて、大切に触れてくれることを思うと、自分から離れることはできない。——せめて付き合ってくれている今だけは、晴臣さんにふさわしくなれるよう努めたい。

わたしはひっそり決意を改め、まずは目の前の書類をどう片付けるのが一番早いか考えることにした。



「まだ終わらないの？ 簡単な仕事のはずだけど」

「すみません、その……資料だけだと把握できないことがあって」

「私の渡したものに不備があったって言いたいこと？」

「い、いえつ、そういう訳では……」

時計はもう22時を回る。

繁忙期なので主任も残っていたようだ。主任とわたし以外誰もいなくなつたオフィスで、帰りがけに声をかけられた。

思わず目を泳がせていると、盛大なため息を吐かれる。

「全く……こんな仕事もできないようじゃ昇進は望めないわね。あなたには変な噂も立っているし」

「……噂、ですか」

「あなたが一番知ってるはずでしょう？　晴臣様とのこと……まあ、どうせ身体でもちらつかせて誘惑したんでしょうけど」

「！？　そんな、ことは……」

どきん、と心臓がいやに鳴り響いた。

思わず言葉が続かずにうつむいてしまう。

決してわざとではない。わざとではないけれど、事実として——初めて会ったラウンジではバニーガール衣装で、サービスも……過激なものだった。

そんなことはしていません、とハッキリ断言することができずに自分の膝を見つめていると、ふふつとどこか得意げな笑いが聞こえてくる。

「あら、本当にそうだったの？　嫌ねえ、はしたない……まあ、そうでもないし噂なんて立つはずがないわね」

「……それ、は……」

「そうでしょ？　だつてあなたみたいな人、晴臣様にふさわしい訳――」
「確かに、ふさわしくないな。こんな人がまどかさんの上司だとは」

そんなことは自分が一番分かっているのにと、ぐつと拳を握ったとき。
少し遠くから呆れたような低い声が聞こえた。

「あつ……は、晴臣さん？」

「会えなかったのはこういう訳だったんだな」

驚いて顔を上げる。

いつの間にか、オフィスの入口そばの柱に晴臣さんが凭れかかっていた。
いつも柔らかく笑いかけてくれる端正な顔立ちを、今は冷たく無表情な
ものに変えて主任のことを睨めつけている。

「晴臣様！？　あつ、いえ……鷹宮さん、申し訳ございません、お恥ずかし
いところを……」

「俺ではなくまどかさんに謝ってくれないか？　彼女が俺を誘惑するなんてありえない。そんな噂を立てるとは、失礼にもほどがあるぞ」

コツ、と革靴の音が人のいないオフィスに響く。

ゆつたりとした足取りで晴臣さんがこちらに近付いてきた。主任はひどく狼狽した様子でわたしから距離を取り、頭を下げている。

「いいえっ、噂はその——……そういった内容のものではなくて、あの」
「ならどんな噂なんだ」

「それは、お、お二人がお付き合いされているのではないかという、そういう噂でして……！」

焦っているのだろうか、ほとんど金切り声で答える主任に驚いて口を挟むことができない。

歩み寄ってきた晴臣さんが固まっているわたしと主任の間に立ち、主任の首からかかっている社員証をちらりと一瞥する。

「それは噂じゃないな、事実だよ。彼女には俺からアプローチした」

「………そ、そんな、まさか、どうして………っ」

「彼女が、君のようにくだらないう噂に振り回されるような人ではないからだ。……なあ、まどかさん、少し時間をくれないか？ この一週間ずっと顔を見たかったんだ」

言葉を無くしている主任からわたしへと視線を移した晴臣さんが、眉を寄せてどこか焦れたげにわたしを見つめる。

確かに今まで丸々一週間会うことが出来なかったのは初めてだったが、まさか会社まで迎えに来てくれるなんて。

とはいえまだやらなければならぬ仕事があるし、主任の手前「わたしもずっと会いたかったです」とは言えない。

「晴臣さん……ありがとうございます。でもごめんなさい、まだ仕事が残っています」

「少しだけ、10分で構わないから。そうだ——渡村主任、と言ったな？」

晴臣さんに手を取られ、そのまま席から立たされる。

10分くらいならどうにかなるかと思って歩み寄ると、呆然と立ち尽くしている主任に向かって晴臣さんが声を掛けた。

「君のまどかさんへの態度については俺から君の上司に伝えさせてもらおう。そしてまどかさんは、明日からしばらく有給を取る。そのつもりでよろしく頼むよ」

「は——はいっ……も、申し訳……ごさいませんでした……っ」

聞いたこともない、温度の低い声音で発せられる言葉に目を見張った。といつても明日も明日でまだ仕事は残っている。

慌てて口を開こうとしたら「まどかさん、二人だけになれる場所に案内してくれないか」と肩を抱かれて、オフィスから連れ出されてしまった。



訪れる人がほとんどいない、奥まった狭い資料室の鍵を閉めてからというものの、まともな言葉が紡げない。

「ふっ♡ ふう……っ♡ ま、まって、はるおみ、さ……っ」

「本当に許せないな……」

「あ♡ んんっ♡ まっ、ち、ちくび……やめっ、んんっ……っ♡」

「一週間、君はあれに耐えていたのだろう。すぐに俺に言ってくれば良かったのに」

晴臣さんは部屋に入ってから全くわたしの話を聞いてくれない。

ドアの鍵を閉めた瞬間、わたしを後ろから抱き込んだかと思えば、何度もうなじへと噛みつくように口付けてきた。そのままワイシャツのボタンを開いて、胸元をぷるん♡ と丸出しにされてしまったのだ。

そこからわたしはずっと、乳首をカリカリカリ……♡ と、引っ搔かれ続けている。

「くくくめ、面と向かって、いわれたのは、っ♡ 今日が、はじめてで、あうっ♡」

「言われる前に気付きたかった」

「あ♡ ううっ♡ そんな、むり、んくっ♡」

「……もう二度と、君に対してあんな口を聞けないようにしないと」

カリカリッ♡ くにゅっ♡

くにくにくにくに……♡

今まで聞いたことのないような、低く唸るような呟きと共に先っぽを摘まれて、思わず溢れ出る声を手で抑える。

こんなことは初めてだ。晴臣さんはずっと、どんな時も優しく触れてくれていたから。

「んんっ♡ ふう♡ ふう……っア♡ くくっまって、声でちや……っうぐうくく……♡」

「聞かせてやればいい。社内全員に君が俺のものだと知らしめてやれば、こんな嫌がらせを受けることもないだろう？」

ぐるぐると喉を鳴らすような低い声と共に、スリスリスリ……♡と指腹でぶら下がったおっぱいの先っぽを撫でられて腰が小刻みに震え出す。いつもより敏感になってしまっているのはどうしてだろう。

背後の晴臣さんから、まるで煮立つかのような苛つきを感じるほど、なぜかおまんこがヒクン……♡と震えてしまう。

「……ああでも、まだかさんの可愛い声を誰かに聞かせるのは惜しいな」
「へっ……？ うあ、ン、ンう……っ♡」

「この可愛い顔も声も、全部俺だけのものにしておきたい……」

覆い被さってきた晴臣さんに顎を掴まれて、深く唇を合わせられる。

わたしの情けなくぐもった声の合間に、興奮したような熱っぽい吐息が聞こえてきてまた身体の熱が上がった。

（うう♡ 晴臣さん、いつもキスするとき優しかったのに……今は無理やり、ぐい♡ って、顎持ち上げられて噛みつくみたいなきスされて……♡ 乳

首ぐにくにするのも全然やめてくれない……♡ 会社でこんな絶対ダメなのに、なんでこんな、ぞくぞくしちゃうの……♡♡♡

「ふ……顔、とろけてきてるな。かわいい」

「ん、んん、ふあ……っ?♡」

「この一週間ずっと、君のとろける顔を見たいとだけ思ってた。とんだ邪魔が入ったものだ……」

きゅむ♡ こねこね♡ こねこね♡ カリカリカリ……♡

今までかけられたことのない低い囁き声と一緒に先っぽをつまんで捏ねられ引つ搔かれて、無意識のうちに腰がひくひく♡ 浮いてくる。
今まで丁寧に触れてもらっていたからだろうか。

優しい快感に慣れた身体へ、しつこいくらい送り込まれる激しい刺激に脳の回路が焼き切れていくみたいだった。

「っひ、ぐう……♡ つちよ、ちよつと、うあッ♡ っっまって、はる、おみ、さ……っ♡」

「どうして？ さつきからずっと嬉しそうに腰揺らしてるのに。ほら、ヘコヘコって……いつもより興奮、してるんじゃないか……？」

「っっっんうう♡ ちが……っ身体、ヘン、だから……ひい、っ！？♡」

晴臣さんの片手がスカートの中に潜り込んでいく。閉じた足の付け根を強引に這う手が、もにゅっ♡ とおまんこを捉えてしまつて全身が震えた。

「ああ、凄いな、まどかさんのおまんこ……ホカホカで、とろつとろだ……♡」

「やあ……っ♡ あ、あつ、だめ、さわつちや、あああ……っ♡」

もにゅ♡ もにゅ♡ ♡ぬちゅっ……♡

ただパンツの上からおまんこを揉まれてるだけなのに、ぬるついた水音が響いてカツと顔に熱がこもる。片手で乳首をカリカリ♡ するのめてもえなくて、下半身がぞわぞわとさざめいた。

（だめ♡ だめこれ♡ おまんこぐにぐに揉まないで♡ 乳首カリカリする

のもやだっ♡ それされると、ぞわぞわするの、上がってきて……っ♡ う
う、ダメ♡ このままじゃわたし、こんなところで、イカされちゃう……っ
♡♡)

「ひ♡ ひっ♡ だめ、晴臣さ……ここっ、かいしやだから、ああんっ♡」
「君が定時で帰ってきてくれさえすればこんなことにはならなかったんだ
ぞ？」

「ふぁ、あ♡ ご、ごめ、にやさ、っんうう♡」

「次あんなことがあったら、絶対に一番に知らせてくれないと」

「っあ♡ あうっ♡ わかつ、わかつたからっ、まって、んひいっ♡ クリ
だめ、だめえ、っあゝゝっ♡♡」

どうやらまだ怒りは収まっていなかったらしい。

どこか責めるような口振りと共に、パンツ越しに浮き上がってしまった
クリトリスをくりくりくりくり♡ と捏ね回されて背筋が仰け反る。

イきたくない、って我慢するほどにおまんこがヒクヒク震えてしまつて、
必死に腰を逃がそうとしたけれど、余計に強く腰を抱き込まれてしまった。

「イクの我慢してるのか？ クリ撫でると、おまんこヒクヒク止まらなくなっちゃうな……」

「っ♡ やっ、やああ♡ イクの、やらあっ……んううぐ……っ♡♡」

こりこりっ♡ すりすり♡ にちゆにちゆにちゆ……っ♡♡

突き抜けるような快感がおなかの奥へと溜まっていく。乳首だけでぶる身体が震えてしまうのに、布越しにクリトリスを捏ね回されていよいよ絶頂感が高まってきた。

こらえるように痙攣するわたしに気づいたのか、晴臣さんが喉奥でクっと小さく笑う。

柔らかく耳たぶを食まれて、わたしは成すすべもなくビクンッ♡ と腰を跳ねさせた。

「いいよ、まどかさん。会社で乳首とおまんこいじられてイクところ、俺に見せてくれ……♡」

「っっっん……っあ♡ あッ♡♡ だめ、イク、イ、つくう、うあああ……」

く……つつっ♡♡」

びくびくびく……っ♡ と何度となく打ち震える身体を後ろからギュ
ウッ♡ と抱き込まれたまま、わたしはイってしまった……♡

頭の中がぱちぱちとはじけるようだ。こんなところでイっちゃった、とい
う恥ずかしさと同時に背徳感が押し寄せて、癖になつてしまいうそで怖い。
落ち着こうとはふはふ息をしている間に、力の抜ける身体を支えるみた
いにして――

ぬりゅんっ♡ と、パンツの中に手を入れられてしまった♡

「ッあ!?!♡ やっ♡ なっ、なんで、まって、もお、おわり、っひいん…
…っ!?!♡♡」

「まだ足りない、もっと感じるどころ見せてくれ。それに……まどかさん、
イクの早かったから。まだ10分、経ってないぞ……?」

うそ、つて思うのに何も言えない。ずるずる身体の力が抜けていって、お
まんこの割れ目に晴臣さんの指が二本、食い込んでいっているからだ。

ただでさえ滑りが良くなっているのに、いったばかりのおまんこからとろお……♡ と溢れる愛液で指がどんどんコーティングされて、余計に入りやすくなってしまうている。

（うう♡ これむり♡ 身体支えられなくてっ♡ イったばかりのおまんこ敏感なのに、ぬりゅ♡ ぬりゅ♡ って指こすれて、きもちよくて、力抜けどちやって……♡ なんにも、動かされてないのに♡ ああダメ、ゆび、入っちゃ、うう……♡♡）

ぬぷ♡ ぬぷっ♡ ぬぷぷ……っ♡♡

足が勝手に開いてしまう。恥ずかしくてたまらないのに、くぱくぱ♡ と歓迎するようにおまんこの入口が広がっていつて、晴臣さんの指がどんどんナカに、入ってきた……♡

「……はは。俺の指、まだかさんのおまんこに食べられちゃったな……♡」
「……っ♡ やっ、やあつ、も……晴臣さ、っふああ♡ やら、これ、ぬいてえ……っ♡」

「入れてないのに抜いてって言われてもなあ……ほら、まどかさん、そうやって足広げずにちゃんと立てば、抜けるんじゃないか……？」

悪戯っぽく囁かれて、わざとらしくぬちゅぬちゅ♡ と入った指でおまんこを揺さぶられて、またぞわぞわとした快感が戻ってきてしまった。
必死にドアに手をつきながら、震える足に力をこめる。

ぬる……♡ と、緩慢な速度で抜けていく指の、骨ばってごつごつとしたところが入口に引っかかっていって、それが気持ちよくてなかなか進まない。

「ふッ、うう……♡ ふうっ♡ はる、おみ、しゃ……ア♡ ううこれ、むり……っ♡」

「はは……また力抜けてきて、ぬぷぬぷ入っていつてる……まどかさん、会社なのに俺の指でオナニーしてるみたいだ……♡」

「ひっ♡ だめ、だめッ、うごかしちゃっ、あ、あー……っ♡」

ずにゅ……♡ トントン♡ トントントンッ♡

また力が抜けて指が入ってきてしまった。

それだけで声が漏れてしまうのに、クリ裏の弱いところを指腹でタツプされて何も考えられなくなりそうだ。

このままじゃまたすぐイってしまう——そう思ったわたしは、ほとんどドアに爪を立てるようにして必死に力を込めた。

（だめ♡ このままナカでトントンされちゃったら♡ 絶対すぐ、おっきい深イキきちやうんだから……♡ 抜かなきゃ、足踏ん張って、ガニ股やめて……あ、ダメ♡ これ、きもちい……奥まで入ってきた指ずるずる抜けてく、きもち、いい……♡）

ぬぼ……♡ と卑猥な水音と共に晴臣さんの指がやつと第一関節まで抜けていって、あとちよつと、つていうところだった。

物欲しげにヒクヒク♡ と収縮を繰り返しているおまんこの入口を軽く撫でた晴臣さんが、耳元で囁いた。

「おまんこから指ずるずる抜くの、気持ちよさそうだなあ……？ 腰へコ

つかせて一生懸命立とうとして……本当、かわいい……♡」

「~~~~っやあ、言わないで……っ耳だめっ、やら、あああ……っ!??♡」

フー……と興奮した吐息と共に囁かれて、がくと力が抜けてしまった♡

ずぬぬ~~~~っ♡ と、奥まで指が入ってくる。力の入らない身体をおまんこで支えるみたいに指をハメられてしまつて、そんなの嫌だし恥ずかしいはずなのに気持ちよすぎてどうすることもできない。

「ははっ、また指入っちゃったな。奥のところ、指にちゅうちゅう吸い付いてきてる……どんだんエッチになつてくまどかさん、かわいいなあ……♡」
「んっ♡ ぶー……っ♡ ううっやらあ、こんな、えっちなからだ、やだあ……っ♡」

「どうして? 俺はまどかさんのエッチなところ、かわいくて好きだよ。……もうこんな会社やめて、ずっと家にいたらいいのに」

一段低くぼそりと呟かれた声にぞわっ♡ と腰から何かが這い登る。

それがどうしてなのか考える間もなく——ぬぢゅぬぢゅぬぢゅつ♡と
奥を掻き回されてしまった♡

「おーっ！？♡　だめっ、だめこれえ、きもちよしゆぎるからッ、ンぐう
う……っ♡♡」

「なあまだかさん、ずつとこうしておまんこ掻き回して、エッチなことしか
考えられなくなったら家にいてくれるか？」

「ツふえ？♡　なっなに、わかんによっ、っあうづっ♡　ひいつ♡　まッ、
……っっ♡♡」

ぬぽ♡　ぬぽ♡　ぬぽっ♡　ズチュズチュズチュ……っ♡♡
一番奥、ぽってり腫れてぬるぬるになった弱いところをこそぐみたい
に動かされて、何を言われているのかもよくわからない。身体を支えてい
られない。

ずるずる下がっていく身体を支えるようにお腹をぐっ♡　と抑えつけ
られて目の前に火花が散った。

（なにこれえ……っ♡ こ、こんなこと、されたことないのに♡ お腹ぐつて抑えつけないながら、硬い指でおまんこズポズポされるの……なんでこんなに、きもちいいの……っ♡ あ♡ やだ、ダメ、おっきいのくる、さつきイottaばかりなのに♡ ふーっふーっ♡ って、息浅くなってる、ヤバイ、またくる……っ♡♡）

「……イきそうか？」

「あっ？♡ な、なんで、バレて、っふああ♡ やッ奥、奥やだ、とんとん、やだああっ♡♡」

「やじゃないだろ、ここトントンすると一気におまんこギュウギュウ締め付けてきてる。……なあ、このまま連続アクメ癖つけようか、まどかさん」

トントン♡ トントン♡ ぢゅぽぢゅぽぢゅぽっ♡

弱いところを容赦なく叩かれて掻き回されておかしくなりそうだ。ほとんど上向きになっている目を瞬かせ、何と言われたのか考える。

今、なんて言われただろうか。低い声で、れんぞくあくめ、って——？

「くっ！？ ダメ、そんな、絶対……っあ♡ あ♡ うううだめだつて
ばああ……っ♡♡」

「癖になったら、仕事なんか考えられなくなるだろ。毎日ずーっと、俺の手
とちんぽでおまんこイクイク♡ つてすること以外、何も考えられなく
なつたらいい」

「♡♡ ひううっ♡ くっダメ、だめっ、ほんとにいくいく、しちやうか
らあ……っ♡」

確かな目的を持った指先が奥をこちゅこちゅ♡♡ と抉るよう
にピストンしてきて目の前が瞬く。一気に足先に力がこもるけれど指が抜
けることはなく、奥までずっぽり♡ 嵌め込まれて揺さぶられた。

「うあッ♡ ああダメっ♡ イッ、ううっ♡ だめ、イ、つきゅ……っうう
う……っ♡♡」

ビクッ♡ ビクンッ♡ ぶるぶるぶるっ♡♡

大きな波に攫われたみたいだった。抑えつけられているはずなのに身体

が大きく波打つ。愛液が太ももとろお……♡ と滴り落ちて、なかなか余韻から戻れない。

はーっ♡ はーっ♡ と息を漏らしながら小さく震えているうちに、突然身体をひっくり返されてしまった。

「もつと何も考えられなくなろうな、まどかさん」

「ふえ……っえ？ あっ、えっ？ う、うそ……もうだめ、ほんとに……しんじやう、晴臣さん……っ」

「死なないさ。どうなっても、俺が世話するからな」

一糸乱れず、頭のとっぺんから爪先まで美しく整ったままの晴臣さんが、わたしの前に跪く。

愛液ですっかり色の変わっているパンツをずり下げているのをどこか他人事みたいに感じて、ハツとしたときにはもう、晴臣さんの指は濡れきったおまんこの肉をぐい……っ♡ と引っ張っていた。

「あ……っ？♡ やっうそ、だめ、だめえッ、そんなとこ、舐めちゃ……っあ

あゝゝ……っ♡♡」

れろお……♡　ちゅっ♡　ちゅうゝゝっ♡♡

舌先がクリトリスに触れて、形の良い唇に甘く吸われて、いったばかりのおまんこがギュウウツ♡　と締まる。

力の入らない腕で晴臣さんの頭を押しやっただけで、綺麗にセツトされた髪がただ少し崩れただけで、離れてはくれなかった。

（うそ、うそ、こんな……こんなところで、わたし……♡　立ったまま、晴臣さんに、おまんこ、舐められて……っ♡　ううだめ、クリちゅうちゅう吸われると♡　なにも考えられない♡　いったばかりなのに、きもちいいのとまんないよお……っ♡）

ちゅぽぽぽ……っ♡　と吸うように舐められて、それだけで腰が抜けそうなのに、またぬりゅんっ♡　と二本指をおまんこの中に潜り込ませられてしまつて頭がバカになりそうだ。

短時間で何回もイったからだろうか。乱暴なぐらいの刺激がむしろ気持ちよくて、勝手におまんこがヒクン♡ ヒクン♡ と収縮する。

「ん……まどかさんのおまんこ、物欲しそうに震えてる。ちんぽ欲しがってるみたいでかわいいな……♡」

「くっっ！？♡ ちが、っああ♡ あうっ♡ お♡ おち、おちんぽっ、ほしく、ない……っ♡♡」

可愛がるようにちろちろ♡ とクリの先っぽを舐められてカクカクと腰が震える。

そんなの欲しくないって思えば思うほど、入口がくぱくぱ開閉を繰り返してしまうのはどうしてだろう。こんな、誘ってるみたいなこと、したくないのに。

「ふ……そうか、じゃあ、欲しくなるまで舐めようか？ まどかさんが会社でトロトロのおまんこ広げて、おちんぽ入れてえ♡ つて言えるまで、ずーっと……♡」

「ひっ♡　　くっく、ふづ♡　ふううつ♡　だっだめ、ぜったい、うあつ、あ、あああ……っ♡」

おちんぼでするみたいに指で膣奥をトン♡　トン♡　トン♡　とピストンされる。もちろんクリをれろれろ♡　舐めるのもやめてもらえない。

叩きつけるような快感にどんどん視界が白んでいく。

制止を繰り返している頭のどこかがじゅわっと溶けて、輪郭を失っていくみたいだった。

「ン、ちゅ……っ♡　ははっ……ダメって言うわりに、すっごく欲しそうにしているの、かわいすぎるな……」

「はえ♡♡？　あっ♡♡　あ、やあっ♡♡　ちが、ちがうのに、ふうう………っ♡♡♡」

へこお……♡♡　へこっ♡♡　へこ……っ♡♡

勝手に腰が動いてしまう。さらけ出したおまんこをゆらゆら揺らして、もつと奥トントンしてえ♡　って、恥ずかしいアピールをしてしまう。

自分の身体がどうなっているのか、今ここがどこなのか、もう、よくわからない。

「よしよし、このまま連続アクメ頑張つて、年中ちんぽのことしか考えられないドスケベお嫁さんまんこになろうな……♡」

「ふあ、……えっ？♡ あ、あ♡ なに……っわかん、な……っお、あおー……っ♡」

トンっ♡ トントントンっ♡ とちゅとちゅとちゅっ♡

欲しかった奥への刺激を貰えて目がとろける。動きに合わせるみたいにかくかく腰が揺れて、それが気持ちいいってこと以外、なにも考えられなかった。

（だめ、こしとまんない♡ もうきもちいのしかわかんない♡ こし、ヘコヘコって揺らすたび、骨ばって硬い指がおまんこの入口ずにゆずにゆ出入りするの、きもちいいよお♡ わたし♡ 晴臣さんに、おまんこおかしくされちゃった♡ 会社でクリ舐められながら、指ちんぽでオナニーして喜ぶ

どすけべおまんこに、させられちゃったんだ……♡♡)

「ああ、ナカ締まってきた……こんなに腰ガクガクなのにちやーんとイク準備できて偉いな、まどかさん♡」

「ふぁ♡ あっ♡ 晴臣しゃ……っうきちやう、れんぞく、れんぞくあくめ、きちやう……♡」

「ン、いいよ、イキまんこずーつと舐めてるから、ふかーいアクメ頑張ろうな……♡」

れろれろ♡ ちゅっ♡ ちゅううっ♡ ヌコヌコヌコ……っ♡♡

がくんと揺れる腰を片手で支えるように掴まれて激しい指ピストンが襲う。目の前がちかちかして真っ白になって、何もかも塗り替えられるみたいだった。

背中も首も仰け反って全身がぴいん♡ っと張る。

「おっダメ♡ ううくる♡ 晴臣ひゃ……っれんぞく、あくめ、くる、うあッ、あああお……っ……っ……っ♡♡」

ビクッ♡ ビクビク……がくんっ!!♡♡
ぷしゅッ!♡♡
ぴしゃっ♡ ぷしゃああ……っ♡♡
何か考える余裕もない。わたしは我慢したあとのおしっこみたいな勢いで思い切り潮を吹いて、いつてしまった……♡

いつている最中で、潮が溢れているというのに晴臣さんは口を離してくれない。

ずっとヌロ♡ ヌロ♡ とおまんこを舐められて何度も身体がビクつく。わたしは抵抗ひとつできず、ただチョロロロ……♡ と勢いをなくした潮を漏らしながら、長く深い余韻に浸り続けることしかできなかった。

「……お、っと。立てなくなっちゃったか？」

「はへ……♡ はへえ……♡ あう……♡ ごめ、なさ……わたし……も、むり、……」

ずるずると視界が下がっていく。身体が全部泥になったみたいで、一ミリ

も力が入らない。

びしょびしょにしちゃってごめんなさいとか、こんなところでやりすぎです、とか——そういうことを言いたいのになにも言葉にならなかった。

呂律も回らずただ瞼がゆつくりと落ちていく。

そんなわたしを見て、ひどく熱っぽく浮かされたような表情の晴臣さんが口を開いた。

「まどかさん、……すごく可愛かった。後始末は俺がするから、目を閉じて。このまま家まで送るよ」

「ふあ……？ あ——……で、でも、まだ、しごと……」

「まだそんなこと言ってるのか？ ダメだ、もう会社には行かせない。明日から当面、他のことを考えられなくなるまで俺に抱かれる覚悟でいてくれよ」

囁く声と共に閉じ込めるように胸の中にぎゅっと抱き寄せられる。

もう逆らえなかった。わたしは、その時ばかりはこくと小さく頷いて、激しい絶頂の余韻に誘われるまま目を閉じた。

——今思えば、あのまま素直に言うことを聞いていればよかったのに、と思う。

そうすれば晴臣さんを、あんなに怒らせることは、なかったはずなのに。